
『ねこみみ公爵と閉ざされた塔』

琴 古都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ねこみみ公爵と閉ざされた塔』

【Nコード】

N3414BA

【作者名】

琴 古都

【あらすじ】

突然異世界に飛ばされた少女、美鶴^{みづる}と黒髪ねこみみの次期公爵（候補）ギルフォルドによる、ほのぼの（？）物語

一話、ねこみみ公爵と異世界の少女

1話、ねこみみ公爵と異世界の少女

空を見上げていました。

そうしたら、不意に空が歪み、ゆっくりゆっくりと落ちてきました。

私は咄嗟にそこへと走り、落ちて来る空を抱きとめました。

——それは、紛れもなく『人』でした。

ガタゴトと音を立てて、立て付けの悪い馬車が石畳の上を走っていた。

今にも崩れそうな様相だが、それを操る御者も、中で何か考えるようにして眉間に指先を当てている人物も、特にその事を気にした様子は無い。

どちらかというと、心ここにあらずといった様子で、ただただ朝靄が掛かる街の中を、二頭と二人は疾走していた。

——馬車の中で考え込んでいる彼、ルイード・フォン・克蘭クは、この国の権力者……というよりも、この国の第一位王位継承者なのである。

そんな彼が、こんな立て付けの悪い『甚だ王子らしくない』と形容すべき馬車に乗り、夜明けの町を疾走しているのには多少の訳があった。

（混沌の魔歌使いが行方不明……、ねえ）

ルイードの頭の中に、つい先日見た、嫌味たらしく、王子を王子とも思わず、けれど何処か屈託無く憎めない笑顔を浮かべて居た幼馴染の黒い髪と赤いルビーの様な瞳が思い浮かぶ。

その彼が、突如として行方をくらませたらしい。

心配が胸を過ぎる……が、それと同時に、『それならそれで良いか』とも心の中で思ってしまった。

——混沌の魔術師。

ルイードの幼馴染がそう呼ばれるのには、多少……どころか、多大なる理由が存在している。

それこそがまさに、彼を『彼らしくした要因』であり、この王国

そのものが彼自身を畏怖している理由だろう。

だがこれも、彼らしいのだが……。

何か大きな事件を起こしたとしても、彼の人柄を知り尽くして居るこの小さな王国内では、『ああ、またか』で済まされてしまうのだから凄い。

しかしまあそれは置いておこう、とルイードは心の中で区切りをつける、再び頭の中で思索した。

今問題なのは、彼がどういった人物であり、どういった人柄をしていて、どんな見目をしているのか。そんな事はどうでも良いのだ。どうでも良い、というのは些か放任すぎる言葉なのだが……、どちらかというと、それを考える前に、その件の彼が存在して居ないのだ。

（また一人で旅に出たと考えるべきか、否か）

彼の養父である公爵は、恐らく笑いながら前者だと断言するだろうが。

（さて、……今回は私の勘が『確実に面倒事だ』と言って居るのだから）

自分と彼の養父と。どちらが正解なのだろうか、と。

ルイードは馬車の中で想い、ガタンツと容赦の欠片も無い止まり方をした馬車の外で、先刻思い浮かべた彼の養父が、にこにここと笑って居るのを見つけ、その場を立ち上がったのだった――。

一話、ねこみみ公爵と異世界の少女2

元来、昔から、産まれた時から。

——取りあえず、思いつく限りの過去の記憶の中で。

彼女——道之木^{みちのぎ} 美鶴^{みづる}が迷子になった回数は、数えても数え切れないほどにある。

気がついたらずでに学校であったり、……それだったらまだ良い方なのだが、その逆で、気が付いたら授業中に家に帰って居た、という場合も多数ある。

その全てが、歩いていてふと気がいたら突然に、という場合が殆どを占めていた。

中でも、目を開けたら目の前に黒髪ねこみみの男が居た、何て事があつたり——。

「で、迷ってきた、と?」

「はい……」

「わざわざ俺の上に？」

「みたいです……」

訂正します。

前文の言葉は、現在進行形の出来事であつたりします。

学校帰り、普通に通学路を友達と歩いて居た美鶴は、不意に何時もの気配を感じて身構えた。

何時もの気配、とは…… まあ何の変哲も無い。数え切れないほど繰り返された結果、身に付いた、迷子になる瞬間の危機感である。そして目の前が眩く光り——気づいたら、黒髪に猫耳を生やし、うさぎの様なあかい瞳をした男の膝の上におちて居た、と。こういう事になる。

「まあ、俺も退屈していたから許してやろう」

そう呟いて、ねこみみをピンツと立てた彼は、ゆつくりと美鶴を床へと下ろした。……と言っても、床一面が大量の本に覆われ、壁一面に、まるで一個の壁画の様に造られている本棚から、ばさばさと定期的に本が落ちて、床に積載されて行つて居る為、『床の上』と言うよりは、本の上、と言った方が正しい気がするのだが。

しかし、この本の恐らく持ち主であろう猫耳の彼は、特にそれを気にした風もなく、近くにうず高く積まれた本の上へと腰を下ろした。

「もう一度言うが、俺は退屈だったんだ。お前がここに来ることに

なつた経緯とやらを話せ」

「え？」

「どうにか出来るかどうかは俺の管轄外だが。お前の奇妙な体験談は『俺の退屈しのぎ』位にはなるだろう？」

だから聞いてやる、と不遜に言い放った彼は、ついつと人差し指で空中に円を描く。

すると不思議な事に——そこから、柔らかな歌声が漏れ出し、彼の手にはいつの間にか、美味しそうな砂糖菓子と紅茶が乗せられていた。

まさに、魔法である。

あんぐりと口を開ける美鶴の姿に、猫耳の男は怪訝そうに眉を顰めた。

「まさかとは思つが、魔歌を知らんのか？」

「ま、か……？」

「知らんのか」

反復して返した美鶴の言葉に、何か納得したように頷き、猫耳の男はふわりと耳と同色の尻尾を楽しげに揺らす。

「そうか、それならば……まあ、辻褄が合わんことも無い」「えと？」

何が言いたいのだろう、と小首を傾げる美鶴に、彼はくつくつと喉を慣らし、口角を意地悪く吊り上げた。

「信じるか否かはお前次第だ。だが事実——現実には、拒めはしない」
「つまり……どういうことですか？」
「急かすな。俺は焦らすのが好きなのだ。……が、まあ良い。教えてやろう」

コクリと喉を鳴らし、期待に満ちた表情を浮かべる美鶴。
その表情に、愉快そうに喉を慣らした後で、彼は言葉を続けた。

「数十年に一度、お前の様な者が来ることがあるのだ。だからこそ『この世界の住人である俺』は理解し、断言する事が出来る。ここは、お前の居た世界ではない」
「え？ それってどういう……」
「どういうも何も、言っただけの意味だろう。『ここは、お前の世界ではない』」
「は……え、えええええ？」

突然の言葉へと動揺の色を見せる美鶴の姿に、猫耳の男は更に可笑しそうに、ルビー色の瞳を細める。

それがまた、顔立ちが整って居なければ憎たらしいものの……、ここを異世界だ、と断言し、頭にぴこぴこ動く耳、尾？ 骨辺りにふわふわと動く尻尾を持った彼に、残念ながら似合ってしまうのだから、何だか口惜しい。

「しかし、運が悪かったな。その現れた先がここだと、この先観光も何も無い」

「――？」

ふつ、と自嘲気味に笑ってみせる彼の姿に、美鶴は首を傾げた。その彼女の瞳を正面から見つめ、猫耳の男は『やれやれ』と言った風に両手を広げ、首を振ると、周囲を取り囲む本の山へと視線を向けた。

「ここは、不思議な場所だと思わないか？」

「……本が、際限なく生まれて居る様に思え、ます」

「あながち、それは間違いではない」

するり、と衣擦れの音を立てながら立ち上がり、彼は片手にカッブを持ったまま、見果てぬ場所まで伸びる本棚を仰ぎ見る。

「この本達を一言で表せば、アカシックレコード、だろう」

「あかしつく……ここど？」

「知らんか。――まあ良い。簡単に言えば、星の記憶、さらにわかり易く言えば、これらは全てが全て、歴史書だといえる」

彼の言葉に、美鶴は足元に無造作に転がっている本へと視線を向ける。

若干古ぼけた表紙をしたそれは、しかし虫に食われた様な様子も無く、ただただそこに、忘れられた過去で在るかのようになり捨てられている。

いや、彼の言う言葉が本当に正しいのであれば、それは実際『忘れられた過去』と表現するのが正しいだろう。

壁に並べられた数え切れない本の群れが、歴史書に遺された史実であるとするならば、足元に打ち捨てられるようにして積み重ねられたその本は、潰えた史実、ではないのだろうか。

そんな事を、じ、と考え込んでいた美鶴の耳に、声を押し殺して笑う猫耳の男の声が響いた。

「忘れられた過去に興味を示すか。……お前は、何とも着眼点が俺と似ていて面白い」

「そうでしょうか？ 何と言うか……私は常に迷子ですから。時折、忘れられた何かの中に迷い込んで居たので」

「ほう？」

美鶴の言葉に、興味深げに尻尾を揺らし、彼は続きを促すように視線をこちらへと向ける――が、ふと何か思い立ったように片手を上げると、美鶴が言葉を紡ぐのを阻止する。

「いや、待て」

「はい」

「その前に『この場所に閉じ込められた同士』として、自己紹介をしよう」

「……、閉じ込められた？」

彼の放った言葉に含まれて居た、若干ただ事ではない単語に、美鶴は瞬時に反応して視線を上げる。

その反応を、見越して居たらしい猫耳の彼は、くつくつと喉を鳴らして可笑しそうに笑い、特に気にした風も無く、言葉を続ける。

「俺の名前は、ギルフォールド・ディ・リアンデ。王国魔歌剣士隊に所属している。そうだな……義父の気が向けば、将来は公爵の地位を賜るだろう」

「す、ごい地位ですね」

「珍しい事ではない。我が王国は小さいのだ」

「それにしてもですよ」

「そうか」

特に気に留めた様子も無く短く答え、ギルフォールド・ディ・リアンデと名乗った、猫耳公爵……もとい、公爵候補の男は、「で？」と美鶴へと視線を向けた。

「そちらの名前は？」

「あ、ええと……。道之木 美鶴です」

「ミチノ・ギ・ミツル？」

不思議な場所で名前を区切った彼——ギルフォールドの言葉に、美鶴は慌てて首を振る。

彼の名乗りで、考慮すべきだった。

「いえ、名前がミツルです。だから多分、ミツル・ミチノギと言え
ば良いでしょうか……」

「ああ、そういう事か」

悪かった、と軽く謝罪をして、ギルフォードは美鶴へと視線を向
ける。

「ならば、改めて ミツル。この『閉ざされた歴史書の塔』へとよ
うこそ」

「あ、はい。あの ギルフォードさん」

「俺の愛称はギルカリッドだ。そのどちらかで構わない」

「なら、ええと……ギル、様」

「堅苦しいのは嫌いだ。呼び捨てで構わない」

ふん、と鼻を鳴らして再び本の山へと腰掛けるギルフォード。そ
れを横目に、美鶴は言葉を続けた。

「なら、ギル。さっきも思ったんですけど……、『閉ざされた歴
史書の塔』というのは？」

「ここが異世界である、と言った様に それもまた、言葉そのまま
の意味なのだが」

「この場所から、出られない、と？」

「そうだ」

「私も、ギルも？」

「ああ」

コクリと頷き、ギルフォールドは、疲れた様にふう、と息を付く。
そして自分の横を片手で叩き、美鶴に横に座るように促した。それに特に反抗する理由も無い美鶴は素直に従い、座った途端に目の前に差し出されたティーカップも素直に受け取る。

「先ほどの反応からして、ミツルは魔歌を知らない様だな」

「まか……？」

「四つの元素精霊を歌を歌って操り、自然現象を起こす方法だ」

「あ……さっきの、魔法、ですか？」

「そちらの世界では魔法と言うのか」

ふむ、と顎に長い指先を当て、彼は何か思案する様に眉間に皺を寄せる。

そして暫らくして、一度頷くと、何事も無かったかのように、言葉が続けた。

「俺はミツルの世界で魔法と呼ばれるものの中で、歴史の中に埋もれた、忘れられた魔歌を探しにここへとやって来た」

「そして出られなくなった？」

「……簡単に言えば。しかも、未だに忘れられた魔歌を見つけられていない」

赤い瞳を鋭く細め、ギルフォールドは不機嫌そうに呟く。

しかし、美鶴からしてみれば……この大量の本の山の中から、たった一つの、しかも忘れられて、埋もれてしまった本を探す事でさえ困難な様に思える。それを軽いことの様に言い、未だに諦めきれない様子を見ると――、彼はいわば、研究熱心な研究者に近いのではないのかと、美鶴は自分の中のギルフォルドの印象を上書きし直したのだった。

なんせ彼の容姿は、その中身と外見では相当ギャップがありすぎるのだ。

切れ長で涼しそうな目元に、通った鼻梁。赤い瞳は宝石の様に濃く輝き、それを縁取る髪と同色の漆黒の睫毛。キリツと釣り上がった眉は、不敵に口角を上げた口元によく似合い、男らしい、という印象を相手に印象付ける。

――しかし実際の彼はというと。

不遜、傲慢、研究者脳、といったとんでもない三拍子を自ら揃えてしまうほどに、癖がありすぎる性格をしている。

「そこへ来たのが、ミッル、という訳だ」

「ああだから……良い退屈しのぎだ、って言ったんですね」

「事実、そうだろう?」

整った容姿を不敵に歪め、ギルフォルドは笑う。

「存外、ミッルが俺の突破口になるとも考えられる」

「はあ、そうなんですか」
「気の抜けた返事だな」

現状に追いつくのが精一杯の美鶴が返した返事が氣にくわなかったのか、ギルフォールドは、む、と眉を顰めると、何か思いついた様に立ち上がる。

「そうだな。魔歌が無かった世界から来たミツルには実感が沸かないのも無理は無い。だから俺が特別に見せてやろう。……俺がこれだけ固執し、古に失われた魔歌を必死に求める理由を——」

ゆらり、と尻尾が楽しげに揺れ、ギルフォールドの頭上に付いた耳がピンと立つ。

正直、美鶴からすると、魔歌というのが不思議なのはもとより、それ以上に何故この世界が、自分の世界での所謂『獣人属性』なのが氣になる所なのだが。

表情がよくよく読み取れないギルフォールドだけに、彼の感情を顕著に表してくれている耳と尻尾は、美鶴にとってはかなりありがたい存在だったのだけれど。

そんなことを美鶴が考えて居るとは露知らず。

ギルフォールドは、腰に帯刀した赤い宝石が柄頭に嵌った剣を抜き放つと、すう、と息を吸い込んだ。

そして——不意に、トンツと彼の靴先が妙に響く音色を響かせた。

「——『世界に眠る赤の記憶。詠み伝えし我が歌は。リディアルク

レーネに捧ぐ』——」

靴が奏でるリズムと、それを弦楽器か打楽器の伴奏の様にして、ギルフォールドの歌声が紡がれる。それは、先刻までの低く心地良い声音とは若干違い、透き通る様な……形容するのであれば、ハープを奏でるような、独特の音をしていた。

「——『焰彩る空の中。深紅の花が我が手で踊る』——」

とん、ととんつ、と 舞う様に彼の足がリズムを刻み、歌声が徐々に質量を増していく。

そして、ギルフォールドの剣が一瞬、中の上で不思議な動きをする。

……と、その瞬間。

ボツと音を立てて、中空に突如として木造りのランプが浮かび、そこに赤い炎が灯る。

それに目を見開いた美鶴を尻目に、ギルフォールドは更に靴先でリズムを刻み、更にそれを増やしていく。

「——『終末は其の手に。いざ、歌に終止符を』——」

それが幾つも幾つも部屋の中に浮かび、ついには美鶴のすぐ傍にまで現れ、思わず怯む。慌てて後方へと足を引こうとしたところで、ギルフォールドの刻んで居たりリズムがひととき大きな音をたて、しん

つ　と静まり返った。

つい、と視線を向ければ……そこには、したり顔でこちらを見つめるギルフォールドと、中空に無数に浮かんで居る木造りのランプが。

「これが、魔歌だ」

「……何か、すごい歌だって事は解りました」

「それだけ解れば十分だ。俺が古の忘れられた魔歌を探して居る理由も、その延長線上だからな」

カチンツと金属音を立てて、赤い宝石の埋まった長剣を彼は鞘へと仕舞う。

そして改めて美鶴へと向き直ると、ふ、と息を吐き出した。

「魔歌を説明するのは難しい。ただ……そうだな。魔歌は自然現象を生み出す音楽の一つだ、と俺は思っ居る」

「俺は、って事は——実際は違っ事ですか？」

「そうだな」

美鶴の言葉にこくりと頷き、ギルフォールドはランプの一つを手に取り、それを指先でくるりと一回転させる。

「見ての通り、魔歌はこうしてなかった物を生み出すことが出来る。つまりは、使い方次第では人と人との争いに使われる事も、ざらにある」

そう言葉にした後で「いや、」と、彼は更に言葉を続けた。

「違うな、……実際は、そちらの方が多い」

「こんな綺麗な歌が、戦場で歌われて、人を傷つけているんですか」
「ああ」

特に取り繕うでもなく素直に頷き、ギルフォールドはふわふわと中空を漂うランプを避けながら美鶴の傍へと近寄って来た。

「考えてみる。自然に起こった自然現象も、時として人を傷つけるだろう。……炎は人を焼き、水は人を穿ち、風は人を切り裂く。地は人を飲み、闇は人を蝕む」

「そうですね」

「魔歌はそれそのものが意味を成している訳では無い。それそのものが祈りで、自然現象を自由に使役するための力なんだ」

それは、相当に危ない力なのではないだろうか、と……美鶴は心の中で思ったのだが、それを読み取ったかのようにギルフォールドは笑い、言葉を続ける。

「ただし、人には向き不向きがある。そして人は神にはなれない。
——つまりは、まあ 掌くらいの火球を投げつけるのが、精一杯だろうな」

そう言ったギルフォルドの言葉に、美鶴は安心した。

……のだが、同時にある事が疑問となってくる。

今現在、中空で漂って居るランプの群れは、明らかにそれを超越したのではないのだろうか、と。

しかし、それもまた彼は読み取った様で、瞳を細めると美鶴の目の前に片手に持って居たランプを突き出した。

「しかし例外は居る。例えばこの俺」

「ギルは、すごい魔歌使いだったのですね」

「ああ。大体の人間は一種類の魔歌しか使えない。……が、俺は二つの属性を同時に操る事が出来る」

その先に、ギルフォルドが何を言いたいのか。……それは、美鶴にも何となく解る気がした。

「火と水は歌うことで人に従う。地はリズムに反応して人に従う。

風は己の中のメロディを奏でる事で人に従う」

「つまり、先刻のギルは……リズムを刻みながら歌をうたった。つまり、地の力で木造りのランプを造って、そこに火の力で炎を灯したのですね？」

「正解だ」

楽しげに美鶴の頭をぐしゃぐしゃと撫で、ギルフォルドはくつくと喉を鳴らした。

「ミツルの読解力と把握能力は、俺が思ってた居た以上ようだ」

なんだか子供扱いされて居る様な気がして——というより実際、身長差が親子に近いほどにあるため、美鶴も何だかんだで彼に言い返すことが出来ない。

美鶴自身の身長が平均よりやや低め、という事もあるのだが、ギルフォールド自身もかなりの高身長だと、美鶴は思う。

羨ましい と、じ、と彼を見つめて居ると……ふと、そのルビーの様に赤く美しい瞳がこちらへと向けられた。

「という事で、俺はこの歴史書の中から古の魔歌を探しているんだが」

「……それは何か、理由があつての事 ですか？ 例えば魔王との戦いに備えて、だとか、世界滅亡の危機だとか」

「いや、単なる道楽だ」

平然と言い放ったギルフォールドの言葉に、美鶴は思わず脱力したくなつた。

彼とはほんの数時間——いや、悪くしたら数十分ほど前に知り合つたに過ぎないけれど、ギルフォールドが相当な物好きだという事は、美鶴にも理解できている。

つまり、彼が言っている事は 正真正銘、嘘偽り無い本当の事、だという事だ。

簡単に言えば、彼は本当に道楽でこの場所へと来た、と。

「しかし、ここが『閉ざされた歴史書の塔』だったのであれば、しっかりと下調べをしておけば良かった、と。今更ながらに一応は思っ
て居るのだ、これでも」

そうは言うが、彼に焦った様子も、現状を嘆いて居る様子も、その
のどちらも浮かんで居る様子はない――、というよりも、彼が最初
に言っていた様に、本当にただ単に塔に引き籠もり、退屈している
だけの様に見える。

「俺の友か義父が助け出してくれるのを期待するのみ、だが……」

「ここへ来るって事は、言っておいたんですか？」

「いや、何も言わずに飛び出して来た」

「……、」

ケロリとした様子で言っただけの事から、それは恐らく日常茶飯
事に近いことなのだろう。

そしてその『日常茶飯事の中の今回のみ』が異常事態だという事
に、彼の周囲の人間がどれだけ気づいて行動してくれるのか……。

「だから取りあえず、退屈凌ぎにミッルを元の世界に返す方法と、
ここから出る方法、それから一番の本命。古の魔歌を探そうと思う
のだよ、俺は」

「そうですか」

「ついでに言えば、俺が見つけるまでミッルは強制参加だ」

「え……」

てつきり、どこか邪魔にならない場所にも居ろ、と言われるか
と思つたのに。

検討が外れて、美鶴は思わず呆然とした表情を浮かべた。

そんな彼女の様子に、彼はくつくつと面白そうに笑うだけで、お
気に入りの玩具を手に入れた子供のように、容赦をするような気配
は微塵も見当たらない。

（とりあえず、部屋を探そう……かな）

若干諦めを感じた美鶴は、溜息をひとつ付くと、今の状況に流さ
れる事を許容する事にした。

幾ら本だらけの塔だと言っても、休む場所くらいはあるだろう。
そう推測して、美鶴は自分を奮い立たせ、背後で腹を抱えて声を
押し殺したまま笑い続けるギルフォルドの姿に、気付くはずも無か
った――。

一話、ねこみみ公爵と異世界の少女3

机の上に置かれた一通の書簡。

それを短い、しかも背丈の低い机の両端に椅子を引いて座り込み、二人の男は声を潜めて話し合って居た。

「やはり、事後処理は貴方様のお仕事のようにですよ」

「……そう仰らないで下さいよ」

お互いにゲンナリとした表情をしている事を知りつつ、二人は同時に溜息を吐き出した。

何故なら、机の上の書簡にはたった一言。——『魔女に喧嘩売ってくる』、——それだけが書かれて居たからだ。

『魔女』と言えば、一応この王国でも……いや、世界中で暗黙の了解として『触れること事態が禁忌』とされた人物の事を指している。ということとはつまり、どう考えても厄介事、面倒事の類だという事は、どんな凡人にでも想像が付くのだ。

ハア、と息を吐き出し、朝焼けの様な色の髪をした青年は、視線を窓の外へと向け、御者台で大口を開けて寝ている男へと視線を向けた。

彼は、知る人ぞ知る人物で、混沌の魔歌使いの親友であり悪友であり、幼馴染でもあり、——この王国で唯一無二、彼の行方を知って居る人間でもある。

しかし、彼もまた非常に癖がある人物で、王国の騎士団に所属しては居るものの……常に混沌の魔歌使いの護衛やら見張り、と称して城内で勤務している事の方が稀、という、とんでもないルイード・フォン・クランク王子直属の騎士隊の隊士であったりする。

そしてついでに言えば、常にそのとばかりを受けて居るのが、その二人の更に上位の立場にある、ルイードであったりする。

お陰で 問題ごとへの対応の速さと解決方法が早くなったのだが、それは感謝すべき部分なのだろうか、とルイードは心底悩んだ。

「しかし、本当に魔女に喧嘩を仕掛けに行ったとして。あの馬鹿息子目的は何でしょう」

「……私の推測では、恐らくあの魔歌狂いの事です。古の失われた魔歌辺りが目的ではないかと」

「それは、一理ありますな」

ふむ、と長い顎鬚を擦り、公爵は皺が多く刻まれた額に更に皺を刻んだ。

彼の息子……、血のつながりとしては、彼の弟の子で、才能を見込んで養子として迎え入れたギルフォード・ディ・リアンデは、公爵の老後を潤すには十分すぎる存在だった。

元々、彼自身も突拍子も無い行動をしては、現国王に苦い汁を飲ませた居たものなのだが……、王位に就いてからは流石にそれも無くなり、彼自身、淡々としたつまらない日々を送っていた。

そこに来て、自分の血を継いだかのような甥っ子である。

顎鬚を擦り、困りきったような表情を浮かべながらも、彼は心の中で心底現状を楽しんで居た。それを、ルードに悟られているか否かは置いておいたとして。

「だとすれば、魔女の書庫……が、有力でしょうか」

「どうでしょうな。（もし私が現国王に悪戯をするとすれば）アカシックレコードに忍び込むくらいはしそうですが」

「……まさか、それは流石にありえませんよ」

あはは、と声を立てて笑い否定してみせた彼。

しかし——、その後で一瞬だけ考える様な仕草をしてみせたルードは、さっと顔を青ざめさせ、足の短い椅子を蹴ってその場に立ち上がった。

「まさか！」

「私はそのくらいしか、奴が失踪する理由を推測できんです」

「……いや、そうか。ギルならそのくらいの事はやらかしても『その方が普通だ』。寧ろそのくらいやらかして失踪でもしないと不審すぎる」

「我が息子ながら、情け無いものです……」

短く嘆息する公爵の姿に、ルードは若干憐れみを含んだ目線を

送って寄越した。……その表情を見る限り、どうやら自分が楽しんで居ることは相手には知られて居ないらしい。

「至急、アカシックレコードへの行き方を探し出すよう、騎士団にも通達します」

「我が馬鹿息子 of 魔歌剣士隊も使ったら良いでしょう」

「はい、そうします」

こくりと素直に頷く碧眼。

余りにも素直で、そして余りにも厄介事を引き受ける体質に若干憐れみが浮かぶ――が、それに明らかに勝って、彼が現国王の少年時代と同じ純粹さを持って居ることに、数年ぶりに楽しくなっていた。

我が甥っ子には感謝をせねば。

だが、それを彼に言うとなると別物だ。

自分に似すぎるほどに似ていて、稀代の魔歌使いと呼ばれる彼は、恐らく公爵の心情も全て理解している。だからこそ彼は、ルイード王子に迷惑をかけ、外面で困った様な表情を浮かべる公爵に向けて『いやいや、礼には及ばんよ』などと言つてのけるのだろつ。

（可愛ければまだマシというものなのだが）

白い純白のマントを翻し、外へと駆け出していく王子の姿を見送りつつ、彼は短く息を吐き出した。

（我が家系の血を継いで居る限り、可愛さを求めるのは愚かという
ものか）

数年前に若くして命を落とした弟ばかり、獣人族の武人として名
を馳せていた彼の妻ばかり。

ギルフォールド・デイ・リアンデの中に可愛さの欠片でも遺伝子と
して入る事は、その耳と尻尾以外にはありえない、と公爵は断言で
きた。

一話、ねこみみ公爵と異世界の少女4

どこまでも続く、高い高い書棚。

それを見上げ、美鶴は改めて感嘆の溜息を吐き出した。正直、彼女はそんな光景を今まで見た事が無かったのだ。

世界有数の大型図書館に行けば、これに近い情景は見られるのだろうが――。それにしても、縦に長く、煙突の様な形状をした図書館は、流石に世界中どこを探しても見つけることは出来はしないだろう。

何より、収納の難しさ云々を置いておいても、あまりに危険すぎる。

古い本は床へと落とされ、積もりに積もった本の中に積載され、落とされた開いた本棚には新しい本が入り込む。

そんな魔法の様な事が現実としてありえて居るからこそ、この書棚は存在できて居るのだ。

「ミッル、」

そしてその図書の群れを有効活用できるのもまた、限られた存在だった。

空中をふわりと浮いて階段を降る様な動きをしながら、こちらへとやって来る黒髪に猫耳の男――ギルフォールド。彼は、美鶴の姿を見つけると、すぐさま目を輝かせ、彼女の横へと降り立った。

「用事は済んだのか」

「一応……部屋らしきものは見つけました」

「部屋らしきもの？」

「どこも本に埋もれていて」

「ああ、寝所が欲しかったのか。そうならば俺に先に言えば、すぐに教えてやったのに」

ふむ、と呟いてギルフォールドは「で？」と首を傾げる。

「その部屋は『寝室だった』のか？」

「……いえ、寝室ではなかったですね」

殆どの部屋が本棚やら、書庫の様なつくりをしていて、テーブルとそれから居心地の良さそうなソファ。暗い室内を淡く照らしだしている、火とも電気とも付かない明るいランプの部屋を見つけるだけで精一杯だったのだ。

けれど、どうやらギルフォールドの口ぶりからして、普通に人が住むことを用途とした部屋が、それなりに存在しているらしい。

そんな美鶴の心情を察したように、ギルフォールドはトンツと美鶴の肩を押し、赤いルビーの様な瞳で奥を合図した。

「ついて来い。案内してやる」

「あ、はい」

前をスタスタと歩き出したギルフォールドの声に、美鶴は慌てて彼の長い足に追いつくように駆け出した。

しかし途中で彼もコンパスの違いに気付いたのか、やや口元をゆるめると同時に、足の速度も緩め、美鶴へと振り向いた。

「大体な。この閉ざされた歴史書の塔で、何かを探するなど正気の沙汰ではない」

「……でも、ギルは私に色々と探すのを手伝えと言いました」

「それは、俺の手伝いだからだ。俺は『惑いの魔歌』に多少耐性があるからな。それなりに搜索する事が出来るし、それさえ破ればこの塔から出ることも可能だ」

「惑いの、魔歌？」

「ああ、それも説明していなかったか」

聞いた事が無い単語に、首を傾げて問い返す美鶴。

そんな彼女の姿に、ギルフォールドは黒いマントの下から手を伸ばし、自らの頭をカシカシと掻いた。

「魔歌にはそれぞれの属性があるだけだ、とは先刻説明したな」

「はい」

「そうか。ならそれは置いて置こう。魔歌の効果を発揮するには、精霊への祈りや自己の生まれながらの才能が影響して来る。……が、その中で、特定の魔歌の旋律を楽譜にする、という方法で発動する魔歌も多少存在しているには存在しているのだ」

つまりは、陰陽師の呪文や魔法使いの魔法陣の様なもの、と言った方が解りやすい。

「その中に、惑いの魔歌と呼ばれる楽譜がある。……力の弱い魔歌使いが描けば、その人物が他の人間から気付かれにくくなる、という効果程度なのだが。力の強い魔歌使いが描けば『何も探し出せなくなる』という厄介な効果を発揮するという、これがまた面倒な代物なのだ」

「もしかして、この塔には、それがかけられている……のですか？」

「ああ、しかも俺が破ることができない上に、耐性がある程度にしか反発出来ない、強い魔歌が奏でられている」

そう忌々しげに呟き、ギルフォールドはふと足を止め、前方を指差した。

「例えばこの先の道。ミツルが探している寢室を目指して歩いてみる」

「……ここを、まっすぐにですか？」

「ああ。ついでに、目的地はこの先に在る」

「解りました」

「俺はここで待っている」

こくりと頷き、彼の指が示す方向に向かって一歩、また一歩と足を進めて行く。ギルフォルドは、そんな美鶴を廊下の壁に背を寄り掛からせて、面白そうに瞳を細めながら見送って居た。――のだが、歩けども歩けども特に何か変わった様子は無く、ぼんやりとしたセピア色の光が廊下を照らし出しているだけだ。

彼は一体自分に何をさせたかったのだろう……と考え始めた所で、ふと目の前に見知った人影が座り込んでいるのが見えた。

「ギ、ル？」

「早かったな」

「え？ どうして此处に居るのですか？」

傍に積まれた本に、退屈そうに腰をおろして居た人物は、美鶴の問いに口角をニヤリと吊り上げて意地悪く笑った。

「言っただろう。惑いの魔歌が掛かって居るのだ、と」

「廊下を一周して来たとか、ギルが先に回ったとかでは……」

「そこまで早く回れるほど狭い場所ではないし、俺は退屈だが面倒事は嫌いだ」

そうきっぱりと言い放ち、ギルフォルドは本の山から立ち上がる。そして目線だけでついて来いと合図をして、長い足でゆったりと

歩き出した。

彼と出会って、まだほんの僅かの時間しか経っていない。……けれど、ギルフォールドが時折見せる不器用な程の優しさは、美鶴の中の警戒心を解くのに十分だったし、迷う事に慣れてしまつて居る美鶴からしてみれば、既に現状に慣れ始めてしまつて居た。

暫らく歩くと、先刻美鶴が歩いていた時間よりも短く、今までとは少しだけ違う扉が目の前に現れる。

「ここから先が、本以外の物が存在している空間だ」

「本以外の？」

「ミツルは、食物を食べなくても生きていけるのか？」

「それは無理です」

「そういう事だ」

つまりどういう事なのだ、と美鶴は問いたくなつた。

しかし、それを問いかけた所で、彼から返つて来る答えは大方予測が付く。

恐らく彼は、『つまりどういう事なのですか？』と問いかけた美鶴に対して、至極当然と言いたげにこう言つだろう。『だからそういう事だ』と。

その光景が目には浮かぶように脳裏に想像出来た美鶴は、質量のある扉をギルフォールドが押し開けるのを、じ、と見つめて居た。

そろそろ、何が起こつても驚かない。そう思つて居たのだ。

——が、そんな美鶴の思いに反して、その先にあつたのは思いも

寄らない光景だった。

そこには、森の奥深くの妖精の里にでも迷い込んだかのような空間が広がって居た。

大きな大樹を中心として、その周りには『赤や青の人型の何か』が歩き回ったり、露天を開いたりと自由に動き回って居る。

暫らく呆然としていた美鶴は、手前で顔を覗き込んで、楽しげにしているギルフォールドに向き直った。

「こ、これは一体なんです？」

「ミツルは、買っても居ない食物を料理できるのか？」

「それも無理です」

「そういう事だ」

再び突っ込む部分の多い返答を返し、ギルフォールドは戸惑って居る美鶴の腕を強引に引っ張ると、中へと踏み込んでいく。

「いじるのもそこそこに、取りあえず説明だけはしておいてやろう」

「はい……。というか、弄られてたんですね」

「ミツルは反応が面白い」

ふ、と楽しげに声を立てて笑い、おずおずと人型の何かから差し出された赤い果実を手を取った。

「閉ざされた歴史書の塔、とは言っても、この中に迷い込んでくる

人間は数少ないだけで、完全に居ない訳では無い。その全てを閉じ込め、出られなくして居たとしたのなら、とつくにあの中は屍で塗れ、死臭に満ちて居ただろう」

そう呟き、手に持った果実をギルフォールドは美鶴の掌の上に乗せた。

「だからこそ、この場所が存在して居る」

「死なせない為に、ですか？」

「簡単に言えばそうだ」

「簡単に言えば？」

ふわふわと漂う様にして、美鶴とギルフォールドの横を極彩色の人が通って行く。それに反射的に会釈をすると、相手も同じ様に美鶴へと会釈を返して来た。

それはつまり……、この様々な色の人たちは意思を持ち、それぞれに行動している、という事になる。

「ここに居る全てが、視覚化された精霊だ。そして存在している物全てが『精霊が作り出した物』だ。凄くファンタジックで面白いと思わないか」

「ギルは、何が言いたいんですか？」

「やはり、誤魔化されてくれないらしいな。まあ良い。つまりな、精霊が作り出した物に影響され続ければ、いずれその人間もまた精霊になる」

「そ、れって……」

思わず、掌の上に乗った瑞々しい赤い果実へと視線を落す。
ギルフォールドが言いたい事、それは恐らく……この場所に存在している物を食べ続け、この場所で生活し続ければ、自分も彼らの様なふわふわとした精霊になつてしまふ、と言いたいのだろう。
ふるつと恐ろしさに体を震わせた美鶴に視線を向け、ギルフォールドは声を立てて笑った。

「とはいえ、一夕一朝でそんな現象が起こる事はない。事実、俺も数ヶ月はこの食べ物食べて居るが影響は皆無だ」
「ギルを基準にしたら駄目だと思います」

正直言つて、彼の魔歌というのがどの程度の強さなのか、それは美鶴には想像できなかった。しかし、それでも彼は若干——いやかなり、常識から外れているのは美鶴にも理解できる。
つまり彼を基準にして考えては駄目だ、という事だ。

「ミッルは気が弱いな。……まあ余り気にするな。それに、もしも精霊になりでもしたら、俺が使役して傍に置いてやるから安心しろ」
「すごく嫌です」

「俺の珍しく働いた親切心を無碍にするとは、良い度胸だ」

そう不機嫌そうに言い放ったギルフォールドは、目尻を若干吊り上げて言つては居るものの、本当に怒つて居る訳では無いらしい。
その証拠に、ふらつと視線を彷徨わせると、ある一点を指差して

足を止めた。

「見つけた。最近に寄って居なかったから曖昧だったんだが 大体合ってたな。——ミッル、あそこだ」

「……？」

「寝る場所と部屋が欲しいんだろう？」

「あ、はい」

「あそこが宿だ。最も、この場所は基本的に金銭は必要としないから安心しろ」

そう言つてギルフォールドが嬉々として指差す方向には、二階建ての周囲の建物よりも大きな建物が建っていた。提げられた看板には、大きな文字で『宿』と書かれて居るのだが、どうやら異世界とは言つても、基本的に文字も言葉も不自由は無いらしい。

その事にホッと安心しつつ、美鶴はギルフォールドに手を引かれるままに、その中へと入って行く。

「チチル、客だ」

そして、カラントと軽いベルの音を鳴らして入ると同時に、ギルフォールドは宿のカウンターに向かって声を掛けた。

それに反応するように、近くに丸まって居た小さな猫がピクリと顔を上げ、こちらを訝しげな金色の目で見つめた後で——「おお！お客様ですニャ！」と、簡単の声を上げ、トンツと床へと降り立つ。

もつとも、色とりどりの精霊人を見て、かつ……動くギルフォル

ドの耳と尻尾を見て居る美鶴は、流石に『喋る猫』程度では、驚かなかったが。

三毛猫は、陽気な調子でふわふわとした片手を上げると、ギルフォルドへと向けてペコリと礼をした。

「ギルの坊もお久しぶりですニャ」

「そうかもしれないな」

「そうですニャ！ 僕の猫時計に換算すると、坊は十年はここにいらして無かったですニャ」

ほらほらつと得意気に、見た目だけ見れば可愛い三毛猫は、首に掛けていた懐中時計をギルフォルドの前に突き出す。

その懐中時計を、チラリと横目に見つめたギルフォルドは、ハア、と眉間を押さえて首を振った。同じ様に懐中時計を覗き込んだ美鶴も、覗き込んだ瞬間、彼の溜息の理由を知る。

何故なら……三毛猫が持つて居る懐中時計は、モーターかプロペラでは無いかと思うほどの早さで、丸い縁の中で物凄いスピードで回転していたのだ。

「一つ言うが。……例えば猫の時間と人間の時間が違えど、その時計は明らかに壊れて居ることは間違いない、と俺は断言する」

「……にゃんと！」

「そんな狂った調子でぐるぐると回る時計、幾らなんでもおかしいと気付け」

「にゃんと、にゃんと！ でも、坊。僕がこれをパパ上から頂いた時点で、既にこうだったにゃ……？」

シヨンボリと頂垂れて、もふもふとした手から懷中時計を落す三毛猫。

その姿に、ギルフォールドは同情した様子を一切見せず、クルリと美鶴へと向き直った。

「美鶴、紹介しよう。この猫は——」

「魔女様の使い魔、チチルですよ！　そしてこのお方は、魔女様のゆうしゅーなお弟子様で、猫人族の武家、チルチル家のご子息様ですよ！　……って、にやんでそんなに、坊は僕を睨むんですよ？」

「チチル。今発言した言葉の全てが全て、余計なことだからだ」

そう不機嫌そうに言って、ギルフォールドは三毛猫……チチルの髭をツンツと引っ張った。それには流石のチチルも驚いたのか、短い悲鳴を上げて、恨めしげな目で天井へと視線を向けてそ知らぬ顔をするギルフォールドを見上げる。

しかし、だ。美鶴からしてみれば、魔女という存在も猫人族という存在も、今始めて聞いた単語であり、その殆どを理解出来ないのだが……。何のことだろう？と首を傾げる美鶴の姿に、ギルフォールドは胸を撫で下ろした様に息を付き、チチルへと向き直った。

「まあ良い、チチル」

「僕のかわいい髭ちゃんへ、丁重な謝罪を要求するにや」

「後でしてやる」

「嘘にや！ 坊はそう言つて、僕に一〇一回謝つてないにや！」

「……、よく覚えて居るな」

「僕たち猫族は、恨み言だけは特別に記憶してるんにや」

エヘンと胸を張るチチルの姿に、ギルフォールドは「厄介な」と
呟いて、瞑目した。

しかしそこは流石ギルフォールド、と言うべきか 彼は直ぐに氣を
取り直して、軽く片手を上げると、言葉を続けた。

「チチル、それはともかくとして、美鶴の案内を頼みたいのだが」
「それで謝つたつもりだったら、僕は悲しいにや……。でも、坊。
美鶴つてのは誰ですにや？」

「見えてないのか？ だとしたらチチルは一体なんの為に、先刻名
乗ったんだ。……。ほら、ここに居るだろう」

口元に手を当て、小首を傾げる三毛猫に嘆息し、ギルフォールドは
自分の後ろを指差す。

その整った指先を金色の目で追ったチチルは——美鶴と目線が合
うや否や、零れ落ちるかと思うほどに目を見開いた。

「にゃ、にゃんと、にゃんと！」

「あの……はじめまして、ミツル・ミチノギです」

「にゃんと！ あ、僕はチチルですにや」

「チチル、くん？」

「チチルで良いですにや。僕もミツルって呼ぶんにや」

「はい、チチル」

ふふふん、と背を逸らし、チチルは口をむずむずと動かして、ギルフォールドへと視線を向けた。

「で、ギルの坊のお嫁さんですかにや？」

「違う、拾いものだ」

「ただ拾っただけの人間に、坊が親切！ にやんと、坊が親切！

……天変地異の前触れかもしれないですよ……魔女様」

「チチル。ここ最近来なかっただけで、そう拗ねるな」

「ここはお話相手がいにやいから、僕は坊が来なければ寂しい一方ですのにや」

少し責める様な目線で、じ、と見つめて居る金色の瞳に、ギルフォールドは諦めた様に首を振った。

「それは悪かった。しかし今日からはミツルが居る」

「でもきつとすぐに、青や赤い人になっちゃうにや。そうしたら結局は僕は寂しいまま、なんにも解消されないんですよ」

「そうかもしれない。それは俺にも分からない。……だが、ただひとつ言える事は、ミツルは恐らく『ただで消えることは無い』」

「……？」

ギルフォールドの言葉に、チチルは頭の上に疑問符を浮かべ、美鶴へと視線を向ける。

けれどそれは、美鶴もその三毛猫と同じ気分で隣で何か思案す

る様に腕を組むギルフォールドへと問うように視線を向けた。
それに気が付いた彼は、目元を意地悪く歪めると、ゆっくりと口を開いた。

「ミツルは異世界から、わざわざ真つ先にこの塔にやって来たんだ」
「にゃんと、ミツルは異世界の！」

「しかもわざわざ、この俺の腕の中にだ。何か理由があるか、単なる精霊の気まぐれか」

「てつきり僕は、堅物、天然、無頓着、女嫌い坊の花嫁に精霊様が送ってくれたんにゃと」

チチルが呟いた言葉を軽く流し、ギルフォールドは「で、」と言葉を続ける。

どうやらチチルの恨み言（拗ねた言葉とも言う）は全て聞き流す事にしたらしい。

「閉じられた歴史書の塔であれば、異世界への帰り方も解るだろう」

「にゃ。あの中から、坊は探すと仰るんですにゃ？」

「ついでだからな」

「ぜええええつたい無理にゃ」

ふるふるふると首を振るチチルは、毛を逆立てて目を吊り上げた。

「大体、ここに坊が入ってどの位経っているかご存知ですかにゃ？」

「数えた事は無いな。……多く見積もっても、大体半年以内くらいだろうか」

「三年ですニヤ」

「それはチチル時計の計算だろう？」

「違うですよ！ 人間時計と人間日読みですよ！」

ぶんぶんと頬を膨らませ、チチルは金色の目を吊り上げて怒った仕草をする。

もつとも、不安定な様子で二本足で立っているため……怒っているのだが、迫力は半減しているのだが。

しかし、と美鶴は心の中で思う。

魔歌という不可思議な力を以てしても、この塔の中では本一冊を探す事でさえままならない。それはつまり……平々凡々な美鶴からしてみれば、一粒の砂の名前を探す様な途方も無い話しなのではないのだろうか、と。

しかも、ギルフォールドに至っては、彼の体内時計がどれくらい進んで居るのかは別として、この塔に三年間居るのだ。

とてつもなく絶望的な予感を、美鶴はひしひしと感じていた。

そんな美鶴の心情を察した様に、チチルは耳の裏を軽く毛づくろいをしながら、憐れむような視線を向ける。

「ミツルが可哀相ですよ。坊は、世間一般とは明らかに掛け離れた感性の持ち主。僕もときどき けっこう、つねに付いていけないと思う事が多いからですからにゃー。多少日数が掛かるうとどうってことないって思ってるんですよ」

「ギル……、私はこの塔から出られるんでしょうか？」

「どうだろう。——それでも俺は、本気で探そうとは思って居るの

だが」

「嘘にや！ 坊が自分の為以外で動かだなんて……。天変地異どころか、宇宙創成が起こっても僕はびっくりしないにや！」

金色の目をくりくりと見開き、チチルは抗議の声を上げた。――が、それはギルフォルドの鋭い一瞥で一瞬のうちに封じられ、耳をぺたん、と垂れさせ頂垂れる。

「面倒事も厄介事も、俺は嫌いだ。……だが、それ以上に退屈が一番嫌いなんだ。――分かるか、チチル？」

「僕にはまったく解らない領域の話ですにや」

「……本当にチチルはつまらない」

「つねづね思っていたけど、坊、僕に対して凄く失礼ですにや！」

ブンブンと怒りを露にするチチルに、けれどやはり――ギルフォルドは特に気にした様子は無く、言葉を続けた。

「兎に角、俺はミッルと忘れられた魔歌を捜す」

「あの、ギル……私の帰り方は……？」

「ああ、そうだ。帰り方も捜す」

「お願いします」

一応、と言いたげに付け加えられた言葉だったが、ギルフォルドが存外――直情的で自分に真っ正直な人間なのだと、今まで見てきた中で解って居た美鶴は、それでも口に出して宣言してくれただけ

でも希望はあるのだと思う事にした。

（それに、私は……物語の主人公の様に、元の世界へ帰りたいと願わない）

美鶴が迷子になっている間に、両親はいつの間にか何処かへと行方をくらませ、物心ついた時には既に、孤児院に居たのだ。

育ててくれた先生方に感謝こそすれ、そう強く『帰りたい』と美鶴は思えなかったし、なにより……気まぐれであれ、ギルフォールドが美鶴を必要としてくれた事に、少なからず嬉しさを覚えていた。

——ギルフォールド・デイ・リアンデ。異世界の猫耳公爵（次期）。黒髪に赤いルビーの様な瞳、容姿だけ見れば美男子と言って良いというのに、独特の感性和一直線にしか歩けない彼の性格が、それを残念ながら霞ませて居る人。

一時の気まぐれにしろなんにしろ、彼に頼らねばこの世界では生きていけず、彼に頼らねば元の世界に還ることも出来ないのだ。

（もしかして、気が付かなかったただで私って、結構ギルに……）

そこまで考えた時、ルビーの様に美しく赤い瞳が面白そうに細められたのを見て、美鶴はそれ以上考える事を止めたのだった。

——考えずとも、彼の願い事は『魔歌をうたわずとも叶う』のだから。

一話、ねこみ公爵と異世界の少女4（後書き）

基本的に作者が真面目ではないので、真面目に見ないで目を細めて
薄目で見ていただけると嬉しいです（土下座）

一話、ねこみみ公爵と女神の伝説

2話、ねこみみ公爵と女神の伝説

規格外だ。

何が規格外か？

そんなものは、規格外だから規格外なのだ。

暗い闇が底知れなく続いていく、月の無い夜。

その中をランプも何も持たず、それどころか黒い外套に身を包み、闇に身を隠すようにして走って居る人物が居た。

——否、訂正しよう。走っている人物たちが居た。

ひとりは既に息も絶え絶えに、もうひとりは余裕そうな表情で、しかし背後の人物を振り返りもせず。細い路地を駆け抜け、怪しげな露天の勧誘を余裕を持って居る人物が払いながら走って居た。

時折、喧騒の音と『異端楽譜』の露天にもう一人が足を止めそうになるが、その度に紅茶の様な色合いをした赤味があったブラウンの髪をした人物が、それを遮って走り出す。

「でも本当に、侵入はできるのだろうか……」

「くつつちゃべってないで、どんどん走ってくださいよ。あんた、只でさえノロマなんだから」

「……本当　容赦が無いというか、敬意も何も無いというか」

「敬意も糞ありませんよ。ああでも……そんな物も、かつてはありました」

「それがいつの間に……」

「とつくに流して捨てましたよ」

ふんつ、と不遜に鼻を鳴らした敬語を付け足しの様にして使っている人物は、ふと何かに気が付いた様に、数歩遅れて走っている人物を振り返った。

「ああ、此処です。ルイード、様」

「常々思っていたんだけど、『それ』気持ち悪いから。普通に呼んでくれ」

「ああ、なら早速そうさせてもらいますよ、ルイード。親父に怒られて以来、様付けしてたんですけど、どうにも慣れないですから、困っていたんです」

「あとその敬語も」

「これは癖です」

とてもそうは思えないけれど、と思いつつ、ルイードは半ば諦め気味に溜息を付いた。

雪こそ積もって無いものの、冬独特のしんとした無音の空間に、その溜息はやけに重々しく響く。それが解ったのか、前を走って居る、少しだけ裾の跳ねたブラウンの頭が怪訝そうに首を傾げた。

「何です」

「……癖だと？ 嘘をつけ」

「命令されずとも、すでに嘘をついていますか」

「そういう意味じゃない。……ああでも、やはり嘘だったのか」

「はあ、まあ、そうですね」

気の抜けた返事を返す、彼——ルイード・フォン・クランクの直属騎士であり、混沌の魔歌使いの親友であり、ルイードの幼馴染であるユーディスカ・ラドアドル、——は不意にとある一軒の家の前で足を止めた。

周囲では、怪しげな外法の楽譜やら精霊の化石（精霊が封じられた石）を打っている露天商が興味深気な表情でこちらを見つめてい

る。

その視線に、ユーディス力は鋭く上に持ち上がった瞳を更に吊り上げ、軽く舌打ちをした。

これら全てを取り締まる事は、もはや裏街では無理に等しい。

だがしかし、これら全てを取り締まる役目を仰せつかつて居るのが、ユーディス力たち、王国の騎士なのだ。……正直、彼からしてみれば、これ以上厄介な事になる前に、ひと暴れしてやりたいというのが本音である。

寧ろ、騎士は騎士でも、魔歌騎士隊に（一応）所属している、自分の親友の様に『気に入らなければ暴れる』、しかもそれを生暖かい目で見られて『あの暴れん坊だから仕方ない』という見られ方をしているギルフォールドが心底羨ましい。

もつとも……実を言うとユーディス力自身も、彼に引け劣らずの型破りぶりを発揮しているのだが、それを知るのはルードだけなのである。

周囲の煩わしい目線から意識を逸らし、ユーディス力は一見ボロ家にはしか見えない家の扉を軽く叩いた。

「師匠、居ますか」

その彼の言葉に、周囲に居た野次馬は、ギョツとしたように目を剥き、慌てて二人から目を別の方向へと移す。それを満足気に見つめ、ユーディス力の中から返って来た「名は何と」という言葉に答えるべく、口を開いた。

「貴方の教え子、ディーとルーです」

「……そうか、そうか。ならば問う。リッドの犯した罪を三つ答えよ」

「師匠の家屋粉碎、師匠の書物全焼失、それからリレイアお嬢様の心を奪った事です」

「……、よろしい」

低くも無く高くも無く、不思議な声音をした声がそう答えた途端。二人の足元から不思議な——、声とも楽器の音ともつかぬ不思議な音色が溢れ、二人の目の前は真っ白に染まり、目を開けたときには、暖炉の前にゆらゆらと規則的に揺れている、ゆり椅子に座った女性の居る部屋の中へと移動していた。

それに真っ先に気が付いたルイードは、その場で優雅に腰を折った。

「お久しぶりです、お師匠様」

「……お久しぶりです」

その二人の動作に、規則的に揺れていたゆり椅子が止まり、その脇からにゅっ、と出てきた白い手が『堅苦しいのはやめろ』と言いたげに上下に動いた。

その動作に、ルイードは相好を崩し、やや碎けた調子で口を開いた。

「お変わりありませんね、師匠」

「わらわが今生、姿を変えることなどありはせぬよ」

「……お元気そうで、良かった」
「何処かの馬鹿弟子に、魔歌の一発や二発食らわせないことには、わらわも死んでも死にきれん」

ふふふ、と機嫌良く笑う声が響き、ルードとユーディスは顔を見合わせた。

なんせ、この師匠——二人からしてみれば、人生の半分以上を共に過ごして居る事になるのだが、機嫌が悪い時には速攻で攻撃的な魔歌を放って来る、ギルフォード以上の気まぐれ者で、未だに気分の上下を読むことが出来ずに居る人物なのだ。

——しかしそんな二人のお師匠様は、今日は目に見えて機嫌が良いらしい。

二人して顔を見合わせ、その理由を思案してみるが……彼女もまた、人とは掛け離れた思考方法をして居る為、それを推測するには至らない。

そんなことを考えて居た二人の目の前で、不意にゆり椅子がキシリと軋み、軽い音を立てて、彼女は床に降り立つ。

さらりとした銀髪が床に流れ落ち、二つに結い上げられた髪に付けられた髪留めが、彼女が動く動作に合わせて揺れる。そして、紫の紫陽花の様な瞳が二人へと向けられ——少女独特の幼い顔立ちの中に、不自然に浮かぶ大人びた笑みを浮かべた。

しかし彼女は、ルードの臍辺りまでの身長しか無く、もしも此処にギルフォードが居て、彼が横に立てば、彼女の身長は彼の腰元にやっと及ぶかどうかしか無い。

彼女は、ルードとユーディスが出会った時から既にこの身長

で、その事を以前問いかけた所によると『今生の私は、酷い業を背負っているのだよ』との事らしい。

それを聞いたユーディスカは思った。とどのつまり、どういふ事なのだ、と。

「さて、そなた等の問いの答えを私はすでに知っておるぞ」

昔の事を思い帰していたユーディスカに、彼のお師匠様は不意に言葉を紡ぐ。

それにいち早く隣に居たルードが反応し、顔を上げた。

「やはりギルは……アカシックレコードに？」

「うむ、おるぞ」

「想像通りではあるけれど、実際に現実であつて欲しくなかった事実ですね」

「それは到底叶わぬ願いであるぞ、ルー。まず、相手は『あのギルフォルド』なのだから」

「……そうでしたね」

——アカシックレコード。

ギルフォルドが軽く侵入してしまった、という事実を軽く話してはいるものの、本来であれば『誰も知りえぬ場所』であり、そして何より『誰も入れぬ場所』でもある。型破りと言つか、相変わらずの常識はずれというか。

生まれた時から振り回されて来たユーディスカからしてみれば、

ここ最近おさまっていた偏頭痛が再発しそうな眩暈を感じた。

「あの場所は、わらわも管轄外でのう。——それに、どうせ入る輩なんぞリッド以外おらぬ。だからして、あの場所には時が数倍に流れる魔歌を施しておいたのだが……それさえ効果が無い」

「……師匠。ギルの立場からこの数ヶ月を考えると、どの位経過しているのですか？」

「ざっと、三年は経っておるわ」

そう眉間に皺を寄せながら呟き、二人の師匠である少女は「しかも」と言葉を続けた。

「しかも、あの馬鹿弟子め。あの塔に間違っただけで紛れ込んだ少女に、『出るには惑いの魔歌を破るしかない』等と嘯きおって」

「……惑いの魔歌というと、探したいものを探せなくさせる、例の物ですか？」

「違う」

「でも確か、惑いの魔歌は……」

そこまで口にして、ルードはとある事に思い至る。

今、師匠が言った言葉がそのままの事実であり、更には自分が知って居る惑いの魔歌の知識を合わせれば——物凄く、嫌な予感にぶち当たるといふ事に。そのことに気付いてしまった。

魔歌使いの一般常識としてであれば、楽譜が存在する魔歌の破り方や対処方法は、最初に魔歌を修練した時点で大体の術者が学ぶ。しかし、その少女……恐らく魔歌使いではない、偶然不幸にもギル

フォールドの近くへと紛れ込んでしまった彼女は、それを知らない。
ということとはつまり……。

「師匠、もしかして ギルは敢て出てこないんですね？ 出る方法など、とつくに知って居るのに」

「ギルですからねえ。ありえなくは無いですし、行動の根拠なんて誰かに推測できるようなものじゃないです」

二人のにも無い言葉に、師匠は薄く笑って銀髪を揺らしながら頷いた。

「あやつの考えて居ることなど、ただ単に『退屈だからやる』が基本的な根拠であろうが」

「それから、『面倒くさいからやらない』も、あいつの場合はありますよ」

「そうなの」

少女は面白そうに、くつくつと喉を鳴らして笑う。

何故なら、ギルフォールド同様に 常に表情や行動、思考回路が良く理解する事が出来ないユーディスカが、久しぶりに目に見えるほどに感情を露にしているのだ。

もっとも、それを口に出したとしたなら、——地の騎士、もしくはクルセイダーと呼ばれる彼の冴えた技が、こちらへと矛先を向けるのだろうけれど。

それでも、互い互いに食えない性格をしている、という事に、ギルフォールドもユーディスカも塵ほども気付いていない、というのが

また面白い。

だが反面、常識という物を二歩も三歩も、それどころか三段跳びで飛び越えた二人。それに常に付き合い、常に面倒事を背負い込み、常に尻拭いをして回って居るルイードが哀れと言うものだ。

本来であれば、ギルフォルドは王国魔歌騎士隊の精鋭騎士として、ユーデイスカは王国騎士団のルイード直属騎士として、王子を守るべきなのであるが。……それが既に『当たり前』として認識されて居る時点で、ルイードの将来の気苦労は目に見えていた。

そんな不幸人間、こと……この国の王子であり、王国最強と呼ばれる二人に『従えられた』ルイードが、ふと口を開く。

「あの、それで……師匠」

「ルー、行き方であればそれは問うまでもない。それをそろそろ教えようと思っておったのだ」

「私が聞きたいこと、察していただけたか」

「こちら、いたいけな少女が魔王の手に堕ちるのは、好き好んで望みはしないのでな」

魔王という表現は、魔歌狂いで気紛れなギルフォルドに似合っている。

そんな、本人に聞かれたら一度や二度の死では免れないほどの事を考えながら、ルイードは更にその先を問うべく口を開いた。

「しかし、その少女は一体どうやって……あんな場所へと入り込んだのです？」

「それはわらわにも解らぬよ。リッドを閉じ込めるためだけに特化した牢獄に、わらわの目を盗んで忍び込む——と、」
「もしかして、魔歌使いなのでしょうか」

ポツリと呟いたルイードの言葉を、ユーディス力がゆるりと首を振ることで否定する。

「それは魔歌を修めた、あんたや俺が、ありえないってことを一番よく知って居るでしょうに」

「……相手は、惑いの魔歌の破り方を知らない、か」

「はい。一番厄介なそれを知らないはずが無い」

「ふーむ、」

「知っていて使わないとしたら、ギルがとくに叩き出してますよ。気に食わないものは、とことん気に食わない男ですからね」

「それは、まあ……身に染みて解って居るよ」

やや遠い目をしながら呟くルイードに、けれどユーディス力は氣遣った様子も無く、こちらを楽し気な目で見つめている、幼い容姿をした師匠へと視線を向けた。

「師匠は、どう推測します」

「さてのう。もっとも、わらわが言える事は、ひとつの可能性だけだのう」

「その可能性とは？」

「リッドの気を引くほど面白い存在で、かつ わらわやリッドに匹敵するほどの力を持ち得ている可能性を持ち、その癖、魔歌のいろ

はも知らぬ」

そんな状況が起こるとしたら『どの様な場合なのか』と師匠は試すような口調で話し、その答えを二人に求める。

長年の付き合いで、結論は自分で出せ、といわれる事に慣れていたルードもユーディスカも、師匠の言葉の端々に浮かぶ不自然さに、とある結論へと漕ぎ付けることが出来ていた。――が、それを正確に正しいと断言できる根拠が、何一つ思い浮かばない。

何しろ、二人はギルフォルドを見つけてさえ居ないのだし、それはつまり……件の少女を一目として見て居ない中での推測でしかないのだ。

「さてさて、わらわの弟子たちよ。……リッドの阿呆を殴る為に、はたまた少女の存在を確かめる為に、閉じられた歴史書の塔へと行きたいかのう？」

そんな、やきもきした様子の弟子たちに向けて、銀髪の少女は、やはり面白気な表情を浮かべ、紫陽花色の瞳を細めて問いかけた。

その問いに、ユーディスカは顔を持ち上げ、頷く。

「勿論です。ギルが居なければ機能しない部分が王国には多すぎますし。……何より、ギルの体感時間では三年以上経って居るというのに、それでも呑気に塔の中に閉じこもっている根性は、率先して叩き直したいところですよ」

きぱつ、と淀みなく告げられた言葉に、ルイードも肯定するように苦笑った。

そんな二人の姿に、師匠も満足気な表情で椅子へと立てかけられていた、櫛の杖を手に取ると、よっこらせ、と見た目には似合わない掛け声をつけて、椅子の上へと昇り、二人へと視線を寄越す。

「その問いや苛立ちは全て、リッドへと押し付けよ。——ついでに、わらわの分も頼んだぞ」

「つつしんで、殴らせて頂きます」

「了解いたしました」

「それから、そろそろ『鍵を返せ』と言っておいでくると、助かる」

「心得ました」

ルイードとユーディスカが同時に答えた瞬間、先刻扉の前でも聞いた様な、不思議な声音が部屋の中へと響きわたった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3414ba/>

『ねこみみ公爵と閉ざされた塔』

2012年1月9日19時50分発行